

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	劉孝綽と陸# : 劉孝綽「酬陸長史#」詩と陸#「以詩代書別後寄贈」詩から
Author(s)	佐伯, 雅宣
Citation	中國中世文學研究 , 63-64 : 62 - 76
Issue Date	2014-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051450
Right	
Relation	



劉孝綽と陸倕

— 劉孝綽「酬陸長史倕」詩と陸倕「以詩代書別後寄贈」詩から —

佐伯雅宣

はじめに

梁を代表する文人の一人劉孝綽（四八一—五三九）には、七十篇ほどの詩が残されているが、その中に「酬陸長史倕」（陸長史倕に酬ふ）という詩がある。これはその詩題のとおり、陸倕という友人から贈られた詩に対して答えたものであるが、全篇百二十二句という現存する宋代以降の六朝詩としては最長の作である。

そしてこの陸倕（四七〇—五二六）も梁を代表する文人であるが、彼の詩はわずかに四篇しか残されていない。ただその中に「以詩代書別後寄贈」（詩を以て書に代へて別後に寄贈す）という作があり、これもまた当時としては珍しい八十四句という長篇の詩である。

筆者はこの二首を贈答詩ではないかと考えている。本稿では、その観点からこれらの詩を考察し、両者の関係および詩が作られた背景について、いささか検討を加えたい。

まずこの両者の関係についてであるが、『梁書』文学上・劉苞伝に以下のようにある。

—
自高祖即位、引後進文學之士。苞及從兄孝綽・從弟孺・同郡到溉・溉弟洽・從弟沆・吳郡陸倕・張率、竝以文藻見知、多預讌坐。雖仕進有前後、其賞賜不殊。（高祖即位して自ら、後進文學の士を引く。苞及び從兄の孝綽・從弟の孺・同郡の到溉・溉の弟洽・從弟の沆・吳郡の陸倕・張率は、竝びに文藻を以て知られ、多く讌坐に預かる。仕進に前後有りとも、其の賞賜は殊ならず。）

ここから分かるように、彼らとともに梁の建国当初より、高祖蕭衍にその文才によって遇されていた。また『南史』到溉伝には、

（任）昉還爲御史中丞、後進皆宗之。時有彭城劉孝

綽・劉苞・劉孺・吳郡陸倕・張率・陳郡殷芸・沛國劉顯及
溉・洽。車軌日至、號曰蘭臺聚。(昉還りて御史中
丞と爲り、後進皆之を宗ぶ。時に彭城の劉孝綽・
劉苞・劉孺・吳郡の陸倕・張率・陳郡の殷芸・沛國の劉
顯及び溉・洽有り。車軌日に至り、號して蘭臺の聚
と曰ふ。)

とあるように、御史中丞任昉を中心とした集まり、いわ
ゆる「蘭臺の聚」の一員でもあった。任昉が御史中丞と
なったのは天監三年(五〇四)のことであり、つまり天
監の初め頃には彼らは高祖から「後進文学の士」として
重んぜられ、また任昉のもとに集っていたのである。

さらに二人はともに昭明太子蕭統の集團にも属し、太
子からも厚遇を受けていた。『梁書』劉孝綽伝に、

時昭明太子好士愛文、孝綽與陳郡殷芸・吳郡陸倕・
琅邪王筠・彭城到洽等、同見賓禮。(時に昭明太子
士を好み文を愛し、孝綽は陳郡の殷芸・吳郡の陸
倕・琅邪の王筠・彭城の到洽等と、同に賓禮せら
る。)

とある。陸倕と劉孝綽は天監七、八年頃にそれぞれ太子
庶子、太子洗馬として東宮管記を司っていたが、太子の
元服が天監十四年(五一五)であることから、上記のよ
うな厚遇はこれ以降のことと考えられる。

これらを見ても分かるように、この両者は、梁の天監
年間を通してさまざまな文学集團にともに入入りしてお
り、その中で密接に交流があったものと思われる。

ではこれらの詩が作られた時期について考えてみた
い。劉孝綽の詩題を見ると、これは長史である陸倕に答
えたものである。そして陸倕が長史となったのは、『梁
書』陸倕伝に

出爲雲麾晉安王長史・尋陽太守・行江州府州事。(出
て雲麾晉安王長史・尋陽太守・行江州府州事と爲
る。)

とあるように、雲麾將軍晉安王の長史となった時である。
後の簡文帝、すなわち晉安王蕭綱が雲麾將軍、江州刺史
となったのは、『梁書』簡文帝紀および『梁書』武帝紀
によれば、天監十四年(五一五)の五月のことである。²²⁾

よってこの劉孝綽の詩は、江州刺史となった晉安王に
従つて江州に赴いた陸倕が贈った詩に対して答えたもの
であろう。

一方、陸倕の詩は、その詩題によると友人と別れた後、
書簡の代わりに贈った詩であるらしい。またこの「以詩
代書別後寄贈」という詩題は『先秦漢魏晉南北朝詩』、
『古詩紀』等によるものであるが、『藝文類聚』(卷二
十一)や『太平御覽』(卷四百十)にも一部引用されて
おり、そこでは「贈京邑僚友」(京邑の僚友に贈る)と

なっている。詩の内容から考えても、これは都を離れた作者が都に残る友人（僚友）たちに贈ったものと思われる。なおここで友人たちとしたのは、贈った相手が一人居ないと思われるからであるが、それについてはまた後述する。

すなわちこれらの詩は、都を離れ、晋安王蕭綱に従って江州に赴いた陸倕が、都にある複数の友人たちに贈ったものと、それに対して答えた一人劉孝綽の詩であると考えられる。

では以下、具体的に詩の中身について見てみたい。

二

まず陸倕の詩である。

- 1 余本水郷士
- 2 閉門江海隅
- 3 時逢世道泰
- 4 蹇足歩高衢
- 5 名成宦雖立
- 6 效微功日疏
- 7 入仕乘肥馬
- 8 出守擁高車
- 9 關門遊昔吏
- 10 遷亭有故書
- 11 江派資賢牧

余は本と水郷の士
門を江海の隅に閉づ
時に世道の泰らかなるに逢ひ
蹇足もて高衢を歩む
名成り宦立つと雖も
效微かにして功日に疏なり
入りて仕ふるに肥馬に乗り
出でて守るに高車を擁す
關門 昔吏遊び
遷亭 故書有り
江派 賢牧に資り

- 12 宗英出建旗
- 13 不勞王布鼓
- 14 無頼露田車
- 15 弼政非責實
- 16 求名已課虛
- 17 長卿病猶在
- 18 修齡疾未祛
- 19 詎知亭長肉
- 20 寧挂府丞魚
- 21 不能未能止
- 22 内訟慚諸己
- 23 僊俛從王事
- 24 纒舟出淮泗
- 25 朋故遠追尋
- 26 瞑宿清江陰
- 27 明旦一分手
- 28 翻飛各異林
- 29 歸舟隨岸曲
- 30 猶聞歌棹音
- 31 行者日超遠
- 32 誰見別離心
- 33 夕次洌洲岸
- 34 明登慈姥岑
- 35 水流多迴復
- 36 余歸良未尋

宗英 出でて旗を建つ
王の布鼓を勞せず
露なる田車に頼る無し
政を弼くるも實を責むるに非ず
名を求むるも已に虚に課す
長卿 病猶ほ在り
修齡 疾未だ祛らず
詎ぞ知らん亭長の肉
寧ぞ挂けん府丞の魚
能あらざるも未だ止む能はず
内に訟へて諸を己に慚づ
僊俛として王事に従ひ
纒舟 淮泗を出づ
朋故 遠く追尋し
清江の陰に瞑宿す
明旦 一たび手を分たば
翻り飛びて各おの林を異にす
歸舟 岸曲に隨ひ
猶ほ歌棹の音を聞く
行く者 日に超遠し
誰か別離の心を見ん
夕に洌洲の岸に次り
明に慈姥の岑に登る
水流れて迴復多きも
余の歸は良に未だ尋ねられず

37 江關寒事早
 38 夜露傷秋草
 39 心屬姑蘇臺
 40 目送邯鄲道
 41 葭葦日蒼蒼
 42 親知慎早涼
 43 劉兄消渴病
 44 休攝戒無良
 45 殷弟癩眩疾
 46 行止避風霜
 47 劉侯有餘冷
 48 宜餌陟釐方
 49 伏子多風咳
 50 門冬幸易將
 51 率更愛雅體
 52 體弱思自強
 53 吏曹勉玉潤
 54 諷議勸金相
 55 比部多暇日
 56 奚用肆龍章
 57 建德何爲者
 58 無墮無人鄉
 59 記室朋從暇
 60 露蠲附行商
 61 議曹坐朝罷

江關 寒事早く
 夜露 秋草を傷せこふ
 心は姑蘇の臺を屬もるも
 目は邯鄲の道を送る
 葭葦 日に蒼蒼として
 親知 早涼を慎しまん
 劉兄 消渴の病
 休攝して良無きを戒めん
 殷弟 癩眩の疾
 行止 風霜を避けん
 劉侯 餘冷有り
 宜しく陟釐の方を餌くらふべし
 伏子 風咳多く
 門冬 幸ひに將ひ易し
 率更 雅體を愛し
 體弱きも思ひ自ら強し
 吏曹 玉潤に勉め
 諷議して金相に勸む
 比部 暇日多く
 奚なにを用てか龍章を肆ほしにせん
 建德 何爲なんすする者ぞ
 人無きの郷に墮つる無し
 記室 朋從は暇にして
 露蠲 行商に附す
 議曹 朝に坐して罷なむるも

62 尺板詞徽芳
 63 雙栖成獨宿
 64 俱飛忽異翔
 65 眷言思親友
 66 沈思結中腸
 67 追惟疇昔時
 68 朝府多歡暇
 69 薄暮塵埃靜
 70 飛蓋遙相迓
 71 李郭或同舟
 72 潘夏時方駕
 73 娛談終美景
 74 敷文永清夜
 75 促膝豈異人
 76 戚戚皆朋婭
 77 今者一乖離
 78 濯然心事差
 79 山川望猶近
 80 便似隔天涯
 81 玉躬子加護
 82 昭質余未虧
 83 八行思自勉
 84 一札望來儀

尺板 徽芳を嗣ぐ
 雙栖 獨宿と成り
 俱に飛ぶも忽ち翔を異にす
 眷みて言に親友を思ひ
 沈思 中腸に結ばる
 追ひて惟ふ 疇昔の時
 朝府 歡暇多し
 薄暮 塵埃靜かに
 飛蓋 遙かに相ひ迓ふ
 李郭 或いは舟を同じくし
 潘夏 時に駕を方ぶ
 娛談して美景を終へ
 文を敷きて清夜を永くす
 膝を促ちかづけて豈に異人ならん
 戚戚として皆な朋婭なり
 今者 一たび乖離し
 濯然として心事差ふ
 山川 望めば猶ほ近きも
 便ち天涯に隔たるるに似たり
 玉躬 子 加護せよ
 昭質 余 未だ虧けず
 八行 思ひ自ら勉めん
 一札 來儀を望む

まず最初に太平の世にあつて功もないのに高官にいた

ったことを言い（11〜10句）、やがて王（晋安王）の幕僚となったが、補佐する才能もないことを恥ずかしく思うと言う（11〜22句）。そして王に従って都を離れることとなり、親しい友人たちと別れたことを嘆いている（23〜32句）。その後、33、34句にあるように「洌洲」「慈姥」という地にて、帰りたいという思いを抱くも帰ることはできず、愁いはますます深くなっていく。このあたりについては後で劉孝綽の詩と合わせてもう少し考察する。

そして季節の移り変わりを詠い、涼しくなることから43句目以降、友人たち「劉兄」「殷弟」「劉侯」「伏子」の病を心配し、養生を勧めている。

では、これらはいったい誰を指しているのだろうか。少なくともその病「消渴病」「癩眩疾」「餘冷」「風咳」からは特定できないが、その他の観点から少し検討してみたい。

まず「劉兄」であるが、このような〈姓〉＋「兄」という呼称は六朝の詩文では他に見られない。一見すると、作者である陸倕よりも年長の友人を指すようにも思われるが、隔句対に「殷弟」とあるので、それとの関連を考えるべきであろう。

そこでこの「殷弟」について先に考えてみたい。このような〈姓〉＋「弟」という呼称は六朝詩にもう一例見られる。梁から陳にかけての詩人江総の「贈賀左丞蕭舍人」（賀左丞・蕭舍人に贈る）詩に「賀生思沈鬱、蕭弟

學紛綸」（賀生は思沈鬱たり、蕭弟は學紛綸たり）

とある。「賀生」「蕭弟」とは、それぞれ詩題にある「賀左丞」「蕭舍人」のことであり、おそらくそれは尚書左丞賀琛、太子中舍人蕭愷を指すものと思われる。いずれも梁代の人であるが、中でも蕭愷は、高祖蕭衍にも重んぜられた蘭陵の蕭子頤の子であり、昭明太子蕭統の死後、太子となった蕭綱に非常に厚遇されていた人物である。

そして江総もまた太子蕭綱の集団に加わっており、そこで交流があったものと思われる。注目すべきはこの蕭愷（五〇五〜五四八）が、江総（五一九〜五九四）より年長という点である。では江総はなぜ彼を「蕭弟」と呼んでいるのか。それはこの蕭愷に兄蕭序があったためではないだろうか。『梁書』蕭子頤伝に「二子序、愷、竝少知名」（二子序、愷は、竝びに少くして名を知らる）とあるように、彼らはともに若くして名声があった兄弟である。よってこの詩にいう「蕭弟」とは、「蕭氏の弟」の意で用いられ、それによって蕭愷を指しているものと考えられる。

そしてここで改めて劉孝綽詩の「殷弟」について考えると、梁代の殷氏には殷芸（四七一〜五二九）と殷鈞（四八四〜五三二）がいる。先に挙げた『梁書』劉孝綽伝や、『南史』到溉伝には殷芸の名が見られるが、一方で『南史』王筠伝には、

昭明太子愛文學士、常與筠及劉孝綽・陸倕・到洽・

殷鈞等遊宴玄圃。太子獨執筠袖、撫孝綽肩曰、所謂左把浮丘袖、右拍洪崖肩。其見重如此、筠又與殷鈞以方雅見禮。(昭明太子文學の士を愛し、常に筠及び劉孝綽・陸倕・到洽・殷鈞等と玄圃に遊宴す。太子獨り筠の袖を執り、孝綽の肩を撫して曰く、所謂左に浮丘の袖を把り、右に洪崖の肩を拍つなりと。其の重んぜらるること此の如し。筠又た殷鈞と方雅を以て禮せらる。)

とある。『梁書』王筠伝にも同じ箇所があるが、そこでは「殷鈞」を「殷芸」に作る。同様の例は『梁書』と『南史』の間で他にも見られ、この両者はしばしば混同されているようである。彼らの血縁関係は定かではないが、同じ陳郡の殷氏であり、『南史』殷鈞伝に「鈞宗人芸」とあることから、同族であることは間違いない。よって「殷弟」とは、「殷氏の弟」(同族の年少者)の意であり、殷鈞を指しているものと考えられる。

ではその「殷弟」と隔句対にあたる「劉兄」とは誰を指しているのか。上記の観点から、「劉氏の兄」の意であるとする、やはり梁代に一族そろって文人として名高い彭城の劉氏、その長兄(同族の最年長者)の劉孝綽を指しているのではないだろうか。なお前掲の『梁書』文学上・劉苞伝や『南史』到溉伝などを見ると、陸倕と交流があった彭城の劉氏として、他に劉苞(四八二〜五一二)、劉孺(四八五〜五四三)が挙げられている。

続いて「劉侯」についてであるが、まず「劉兄」と「劉侯」という呼び分けに注目したい。この「劉兄」が、「劉氏の兄」、劉孝綽を指しているとすれば、彼の弟や同族の従弟らを「劉侯」と呼ぶとは考えがたい。よってこの「劉侯」は、劉孝綽ら彭城の劉氏とは別の劉氏を指しているのではないだろうか。となれば前掲『梁書』文学上・劉苞伝や『南史』到溉伝から、沛国の劉氏である劉頤を指すものと考えられる。

そして「伏子」については、伏嘔(四六二〜五二〇)、あるいはその子伏挺(四八四〜五四九?)であろう。それ以外に伏姓のものには見られない。いずれも陸倕との関係は定かではないが、陸倕や劉孝綽とも交流があった任昉と交流があった人物である。しかし伏嘔は陸倕より年長であることを考えると、他の人物と同世代である子の伏挺と見るべきであろう。

このように検討していくと、「劉兄」とは劉孝綽、「殷弟」とは殷鈞、「劉侯」とは劉頤、「伏子」とは伏挺を指すという仮説が成り立つ。

ここで次にこれらの人物が挙げられている順序に注目したい。実はこのように一つの詩の中に複数の友人を挙げて詠う詩を、陸倕はもう一首作っている。それは「贈任昉」詩であるが、その中に以下のようにある。

任君本達識

張子復清修

任君は本と達識
張子は復た清修

既有絶塵到 既に絶塵の到有り
復見黄中劉 復た黄中の劉を見る

これは先の『南史』到溉伝の記述に続けて引かれているもので、いわゆる「蘭臺の聚」に参加した人々について詠われている部分である。その主催者たる任昉(任君)(四六〇〜五〇八)が筆頭に挙げられているのは当然として、以下、張率(張子)(四七五〜五二七)、到溉(絶塵の到)(四七七〜五七八)、劉孝綽(黄中の劉)(四八一〜五三九)と続くように、これは実は年齢順となっている。ここから考えると、やはりこの「以詩代書別後寄贈」詩においても、年齢というのは意識されているのではないだろうか。

この詩が交わされたであろう天監十四年(五一五)當時の年齢は以下の通りである。

劉孝綽(劉兄) 三十五歳

殷鈞(殷弟) 三十二歳

劉頤(劉侯) 三十三歳

伏挺(伏子) 三十二歳

殷鈞と劉頤の間は年齢順が逆転するが、少なくとも对句(隔句对)の間においては、先に挙がっている人物が年長であり、また同じ劉姓の二人の間でも先に挙がっている方が年長となる。よってこの年齢という点もまた、先の仮説を補強する材料となろう。

以上の考察から43〜50句は、劉孝綽、殷鈞、劉頤、伏

挺といった友人たちの病を心配し、養生することを勧めているものと見られる。しかし『梁書』『南史』等の伝記に彼らの病についての記述はない。

そして51〜62句は、いささか難解ではあるが、「率更」(太子率更令)、「吏曹」(吏部に同じ。尚書吏部郎)、「比部」(尚書比部郎)、「建徳」(建徳令)、「記室」(10)、「議曹」(議曹從事史。あるいは儀曹に同じ。尚書儀曹郎)は官職名であり、それぞれの官にある友人たち(僚友)を指し、彼らを誉め称えているものと解釈しておく。しかしこれらの人物の特定は、『梁書』『南史』等から考察しても、今のところほぼ不可能である。

いずれにせよ陸倕は、劉孝綽、殷鈞、劉頤、伏挺らほか、都にいるさまざまな友人たちに思いを馳せ(43〜62句)、彼らと別れたことを嘆き(63〜66句)、さらにはかつてともに遊んだ日々を思い出して以下のように詠う。

薄暮塵埃靜	薄暮	塵埃靜かに
飛蓋遙相迓	飛蓋	遙かに相ひ迓ふ
李郭或同舟	李郭	或いは舟を同じくし
潘夏時方駕	潘夏	時に駕を方 <small>なら</small> ぶ
娛談終美景	娛談	終して美景を終へ
敷文永清夜	敷文	敷きて清夜を永くす

ここでは「李郭」(後漢の李膺と郭太)、「潘夏」(晋

の潘岳と夏侯湛(し)といった人物を挙げ、自分と孝綽らとの關係をそれに擬えているが、そこに描かれる情景は、曹植「公讞詩」(『文選』卷二〇)に「清夜遊西園、飛蓋相追隨」(清夜 西園に遊び、飛蓋 相ひ追隨す)とあるような、建安文壇のいわゆる「西園の遊」を彷彿とさせるものであった。

そして最後に友人たちとは遠く離れてしまったが、身体を大切に、手紙を寄せてくれることを求めて結びと
している。

三

ではつづいて劉孝綽の詩を見てみたい。

- | | |
|----------|--------------------------------|
| 1 王粲始一別 | 王粲 始めて一たび別れ |
| 2 猶且歎風雲 | 猶ほ且つ風雲を歎く |
| 3 況余屢之遠 | 況んや 余 屢しば之くこと遠く |
| 4 與子亟離羣 | 子と亟しば離羣するをや |
| 5 如何持此念 | 如何ぞ 此の念ひを持ち |
| 6 復爲今日分 | 復た今日の分れを爲す |
| 7 分悲宛如昨 | 分悲 宛 <small>あつか</small> も昨の如きも |
| 8 弦望殊揮霍 | 弦望 殊に揮霍たり |
| 9 行舟雖不見 | 行舟 見えずと雖も |
| 10 行程猶可度 | 行程 猶ほ度る可し |
| 11 度君路應遠 | 君の路の應に遠かるべきを度り |
| 12 期寄新詩返 | 新詩を寄せて返されんことを期す |

- | | |
|----------|--|
| 13 相望且相思 | 相ひ望みて且つ相ひ思ひ |
| 14 勞朝復勞晚 | 朝に勞し復た晩に勞す |
| 15 薄暮闈人進 | 薄暮に闈人進み |
| 16 果得承芳信 | 果して芳信を承くるを得たり |
| 17 殷勤覽妙書 | 殷勤に妙書を覽 |
| 18 留連披雅韻 | 留連として雅韻を披く |
| 19 洌洲財賦總 | 洌洲 財賦總べ |
| 20 慈山行旅鎮 | 慈山 行旅鎮す |
| 21 已切臨睨情 | 已に臨睨の情を切にして |
| 22 遽動思歸引 | 遽かに思歸の引を動かす |
| 23 歸歎不可即 | 歸らんか 即く可からず |
| 24 前途方未極 | 前途 方に未だ極まらず |
| 25 覽諷欲諛誚 | 覽諷して諛 <small>むじり</small> を諛 <small>わ</small> れんと欲し |
| 26 研尋還慨息 | 研尋して還た慨息す |
| 27 來喻勗雕金 | 來り喻して雕金を勗 <small>た</small> けんとするも |
| 28 比質非所任 | 質を比すれば任ふる所に非ず |
| 29 虛薄無時用 | 虛薄にして時用無く |
| 30 徘徊守故林 | 徘徊して故林を守る |
| 31 屏居青門外 | 青門の外に屏居し |
| 32 結宇瀟城陰 | 宇を瀟城の陰に結ぶ |
| 33 竹庭已南映 | 竹庭 已に南に映じ |
| 34 池牖復東臨 | 池牖 復た東に臨む |
| 35 喬柯貫簷上 | 喬柯 簷を貫きて上り |
| 36 垂條拂戶陰 | 垂條 戸を拂ひて陰す |
| 37 條開風暫入 | 條開きて風は暫く入り |

38 葉合影還沈
39 帷屏溽早露
40 階甍擾昏禽
41 衡門謝車馬
42 賓席簡衣簪
43 雖愧陽陵曲
44 寧無流水琴
45 蕭條聊屬和
46 寂寞少知音
47 平生竟何托
48 懷抱共君深
49 一朝四美廢
50 方見百憂侵
51 曰余濫官守
52 因之泝廬九
53 水接淺原陰
54 山帶荆門右
55 從容少職事
56 疲病疎僚友
57 命駕獨尋幽
58 淹留宿廬阜
59 廬阜擅高名
60 岩岩凌太清
61 舒雲類紫府
62 標霞同赤城

葉合して影は還た沈む
帷屏に早露溽ひ
階甍に昏禽擾る
衡門 車馬を謝し
賓席 衣簪簡なし
陽陵の曲に愧づと雖も
寧ぞ流水の琴無からんや
蕭條として聊か屬するも
寂寞として知音少なし
平生 竟に何くにか托さん
懷抱 君と共に深し
一朝にして四美廢れ
方に百憂の侵すを見る
曰に余 官守を濫りにし
之に因りて廬九を泝る
水は淺原の陰に接し
山は荆門の右に帶る
從容として職事少なく
病に疲れ僚友を疎んず
駕に命じて獨り幽を尋ね
淹留して廬阜に宿る
廬阜 高名を擅にし
岩岩として太清を凌ぐ
舒雲 紫府に類し
標霞 赤城に同じ

63 北上輪難進
64 東封馬易驚
65 未若茲山險
66 車騎息逢迎
67 山橫路似絕
68 徑側樹如傾
69 蒙籠乍一啓
70 礫磳無暫平
71 倚巖忽迴望
72 援蘿遂上征
73 乍觀秦帝石
74 復憩周王城
75 交峯隱玉霽
76 對澗距金楹
77 風傳鳳臺瑄
78 雲渡洛賓笙
79 紫書時不至
80 丹爐且未成
81 無因追羽翮
82 及爾宴蓬瀛
83 蓬瀛不可託
84 悵然反城郭
85 時過馬鳴院
86 偶憩鹿園閣
87 既異人世勞

北上 輪は進み難く
東封 馬は驚き易し
未だ茲の山の險しきに若かず
車騎 逢迎するを息む
山横はりて路は絶ゆるに似
徑側して樹は傾くが如し
蒙籠 乍ち一たび啓き
礫磳 暫く平らかなる無し
巖に倚りて忽ち迴望し
蘿を援きて遂に上り征く
乍ち秦帝の石を觀
復た周王の城に憩ふ
峯に交はりて玉霽隱れ
澗に對して金楹距たる
風は鳳臺の瑄を傳へ
雲は洛賓の笙を渡す
紫書 時に至らず
丹爐 且つ未だ成らず
羽翮を追ひ
爾と蓬瀛に宴するに因無し
蓬瀛 託す可からず
悵然として城郭に反る
時に馬鳴院に過り
偶たま鹿園閣に憩ふ
既に人世の勞に異なり

88 聊比化城樂
89 影塔圖花樹
90 經臺總香藥
91 月殿曜朱旛
92 風輪和寶鐸
93 園椶即重嶺
94 階基仍巨壑
95 朝猿響薨棟
96 夜水聲帷薄
97 餘景驚登臨
98 方宵盡談諠
99 談諠有名僧
100 慧義似傳燈
101 遠師教逾闡
102 生公道復弘
103 小乘非汲引
104 法善招報能
105 積迷頓已悟
106 爲權得未曾
107 爲權誠已往
108 坐臥猶懷想
109 況復心所積
110 茲地多諧賞
111 惜哉無輕軸
112 更泛輪湖上

聊か化城の樂に比す
影塔に花樹を圖き
經臺に香藥を總ぶ
月殿 朱旛曜き
風輪 寶鐸に和す
園椶 重嶺に即き
階基 巨壑に仍る
朝猿 薨棟に響き
夜水 帷薄に聲す
餘景 登臨に驚せ
方宵 談諠を盡くす
談諠に名僧有り
慧義 傳燈に似たり
遠師 教は逾いよ闡く
生公 道は復た弘し
小乘は汲引に非ず
法善は報能を招く
迷を積みて頓かに已に悟るも
權を爲して得ること未だ曾てあらず
權を爲すは誠に已往
坐臥に猶ほ想を懷く
況んや復た心の積む所
茲の地に諧賞多きをや
惜しいかな 輕軸の
更に輪湖の上に泛ぶ無し

114113 可思不可見 思ふ可くして見る可からず
115114 離念空盈蕩 離念 空しく盈蕩す
116115 賈生傳南國 賈生 南國に傳たり
117116 平子相東阿 平子 東阿に相たり
118117 優游匡贊罷 優游して匡贊罷み
119118 縱橫辭賦多 縱橫に辭賦多し
120119 方寸幸同貫 才を方ぶるに幸ひに同貫なり
121120 無令絕詠歌 詠歌を絶えしむる無かれ
122121 幽谷雖云阻 幽谷 云に阻まると雖も
煩君計吏過 君が計吏の過るを煩はす

まず最初に王粲の詩を引き合いに出して陸倕と別れたことを嘆き(1〜6句)、遠く離れてしまつて月日が経つたこと、待ち望んでいた詩を受け取つたことなどが述べられる(7〜18句)。そして19句目から以下のように詠う。

洌洲財賦總 洌洲 財賦總べ
慈山行旅鎮 慈山 行旅鎮まる
已切臨睨情 已に臨睨の情を切にして
遽動思歸引 遽かに思歸の引を動かす

これはおそらく陸倕の詩の33〜36句、
夕次洌洲岸 夕に洌洲の岸に次り

明登慈姥岑 明に慈姥の岑に登る
水流多迴復 水流れて迴復多きも
余歸良未尋 余の歸は良に未だ尋ねられず

を踏まえてのものと思われる。

ここでいう「洌(洌)洲」とは、「溧洲」ともいい、建康の南西三十キロほどのところにある洲の名である。また「慈山」(慈姥)とは山の名で、洌洲からさらに南西に十キロほどの長江のほとりにある。この「洌洲」と「慈山」(慈姥)については、建康近くの地名として史書には見られるもの¹⁵⁾。六朝詩では他に用例は見られない。それがこの陸倕と劉孝綽の詩にのみ見られ、なおかつ同じような対句で用いられている点は留意すべきであろう。

また劉孝綽の詩の21句目「臨睨之情」とは、『楚辭』離騷に「陟陸皇之赫戲兮、忽臨睨夫舊郷」(皇の赫戲たるに陟陸し、忽ち夫の舊郷を臨睨す)とあるのに基づき、故郷の方を眺め、それに心惹かれる思いをいう。

すなわち「洌洲」「慈姥」にいたった陸倕が、都の方へ帰り流れる長江を見て、自分も帰りたいたのだが帰れないと詠うのに対して、劉孝綽は、「洌洲」「慈山」(慈姥)は旅人が立ち止まる地であり、そこに至ると帰りたいという思いが湧き起こってくるのは当然だという共感を詠っているのである。まさにこれはこの二首が贈答詩という関係なればこそであろう。

そしてこの共感には劉孝綽自身が同じような経験を持っていたためでもある。

劉孝綽は天監六年(五〇七)頃と天監九年(五一〇)頃、江州刺史となった安成王蕭秀や建安王蕭偉に従って、この時の陸倕と同じように江州へと赴いている。劉孝綽の詩の先の句に続く23、24句、

歸歟不可即 歸らんか 即く可からず
前途方未極 前途 方に未だ極まらず

とは、かつて同じような境遇にあった劉孝綽が、帰りたいと思っても帰れなかったことを思い出して詠っているのではないだろうか。

そして劉孝綽は続いて自らの才の乏しさと故郷に退居していたことを述べ(27く32句)、退居していた家の様子を詠う(33く40句)。さらに知音の友の少ないことを嘆き(41く46句)、胸の奥にある憂いは陸倕と同じように深いものだという(47く50句)。

そして51、52句「日余濫官守、因之泝廬九」といい、以下延々と廬山の様子が詠われる。すでに述べたようにこの時劉孝綽は都にあり、彼が「廬九」(廬江郡・九江郡)、すなわち江州を訪れたのは天監六年、あるいは九年頃である。よってこの部分は、孝綽がかつて官に従って江州に赴いた際、そこで訪れた廬山の様子を思い出して述べているのである。廬山の険しき、雄大さを述べ(59

く76句)、そこで神仙となることを願うも出来なかったことを詠い(77く82句)、そして城郭へと帰る途中、おそらく廬山にあつたであろう馬鳴院、鹿園閣という寺院を訪れたこと(83く86句)、またそれらの素晴らしさを詠う(87く98句)。さらにはそこで名僧に会い、教えを受けたことなどが述べられる(99く106句)。

おそらくこれらの描写は、かつて劉孝綽が訪れた江州・廬山の素晴らしさを、今江州にある陸倕のために詠っているのではないだろうか。そして110句目「茲地多諧賞」とは江州・廬山のことを指し、それを今の自分は遠く離れているがために、¹¹³句にあるように「可思不可見」と詠っているのである。

そして最後に漢の賈誼や張衡など、かつて地方に赴いてなお優れた詩文を多く作った文人を引き合いに出して、陸倕は彼らと同じ才能があるので、ぜひとも詩を贈ってほしいと述べて結びとしている。

以上、陸倕「以詩代書別後寄贈」詩と劉孝綽「酬陸長史倕」詩を贈答詩という観点から考察してみた。

陸倕は都を離れ江州に赴いた際、都に在る複数の友人たちに、書簡に代えて詩を贈り、友人たちの病を心配し、あるいは才能や徳を称えつつ、彼らとともに遊んだ日々を思い出し、離ればなれになったことの寂しさを詠っている。それに対して劉孝綽は、自身もかつて都を離れ、江州へと赴いた経験から、その憂いに共感するとともに、

かつて訪れた廬山の素晴らしさを述べ、そのような地が江州にはあると詠うことで、彼を慰めようとしているのではないだろうか。このように見ると、これらの詩から両者の関係、とりわけ劉孝綽の陸倕に対する深い思いやりというものがうかがえるであろう。

おわりに

天監十四年(五一五)とは、その正月に昭明太子蕭統が都建康において元服した年である。よってこれ以降、昭明太子を中心とする文学集団が本格的に活動していくものと思われる。すなわちそれまでは高祖蕭衍を中心に、沈約、任昉ら南齊時代からの文人たちが文壇を主導していたが、この時期から昭明太子蕭統を初め、弟の晋安王蕭綱、湘東王蕭繹らを中心に、梁代の新たな文人たちが新たな時代を築いていくようになるのである。

つまりこの年は、梁代文壇の一つの転換期と言える。そしてそのような時期に交わされたのが、この陸倕と劉孝綽の詩であった。これらの詩は両者の関係を示すものであるとともに、当時の文壇状況の一端がうかがえるものでもある。しかし詩の解釈については、まだ不明な部分も多く、それらのより詳細な読解は今後の課題としたい。

注

(1) この詩の解釈については、佐藤利行・佐伯雅宣「劉孝綽

『酬陸長史偃』詩譯注」(『中国古典文学研究』第十一号)を参照。

(2) 『梁書』簡文帝紀に「(天監)十四年、徙爲都督江州諸軍事、雲鷹將軍、江州刺史、持節如故」(十四年、徙りて都督江州諸軍事、雲鷹將軍、江州刺史と爲り、持節は故の如し)とあり、『梁書』武帝紀・中に「五月丁巳、以荊州刺史晉安王綱爲江州刺史」(五月丁巳、荊州刺史晉安王綱を以て江州刺史と爲す)とある。

(3) 唐詩には友人に対する敬称として何例も見られる。自分より年長の相手を指すことが多いようであるが、相手が不明な場合も多く、必ずしもすべてがそうとは言えない。例えば岑参「送許子擢第歸江寧拜親因寄王大昌齡」(許子の擢第して江寧に歸り親を拜するを送る 因りて王大昌齡に寄す)詩(『全唐詩』卷一九八)に「王兄尚謫宦、屢見秋雲生」(王兄は尚ほ謫宦せられ、屢しば秋雲の生ずるを見る)とあるが、この「王兄」は王昌齡を指し、岑参よりは二十歳ほど年長である。しかし白居易「歲日家宴戲示弟姪等兼呈張侍御二十八丈殷判官二十三兄」(歲日家宴に戯れて弟姪等に示し兼ねて張侍御二十八丈・殷判官二十三兄に呈す)詩(『全唐詩』卷四四七)には「猶有誇張少年處、笑呼張丈喚殷兄」(猶ほ少年に誇張する處有り、笑ひて張丈を呼び喚び兄を喚ぶ)とあり、この「殷兄」は、「殷判官二十三兄」のことであるが、朱金城『白居易集箋校』によると殷堯藩を指すという。殷堯藩の生卒年は不明であるが、元和中(九年?)の進士であるため、白居易よりは後輩になる。

(4) 太子蕭綱と蕭愷、江総との關係については、森野繁夫先生『六朝詩の研究』第二章・第三節「梁(後期)の文学集團と中心人物」を参照。

(5) 『梁書』王規伝に「敕與陳郡殷鈞、琅邪王錫、范陽張緬同侍東宮、俱爲昭明太子所禮」(敕ありて陳郡の殷鈞、琅邪の王錫、范陽の張緬と共に東宮に侍し、俱に昭明太子の禮する所と爲る)とあり、やはり『南史』では「殷鈞」を「殷芸」に作る。

(6) 劉孝綽の弟の劉孝儀や劉孝威、あるいは従弟の劉遵らには後の簡文帝蕭綱に、太子時代から重んぜられていた。その一族の隆盛なさまについて、『梁書』劉孝綽伝に「孝綽兄弟及羣從諸子姪、當時有七十人。竝能屬文、近古未之有也」(孝綽の兄弟及び羣從諸子姪、當時七十人有り。竝びに能く文を屬り、近古未だ之れ有らざるなり)とある。

(7) 『梁書』良史・伏暉伝には、「幼傳父業、能言玄理、與樂安任昉・彭城劉曼俱知名」(幼くして父の業を傳へ、能く玄理を言ふ。樂安の任昉・彭城の劉曼と俱に名を知らる)とあり、『梁書』文学下・伏挺伝には、「父友人樂安任昉深相歎異、常曰、此子日下無雙」(父の友人樂安の任昉深く相ひ歎異し、常に曰く、此の子日下に雙ぶ無し)とある。

(8) なお「劉侯」について、その他にも梁代に劉氏は多く、彭城、沛国以外には、平原の劉氏である劉峻(四六二〜五二二)・劉杳(四八七〜五三六)、南陽の劉氏である劉子遵(四七七〜五四八)、東莞の劉氏である劉勰(四六六?〜五二一?)などがある。陸倕と直接の關係を示す資料はない

が、高祖蕭衍や昭明太子に重んぜられた者もおり、陸倕と交流があったとしても不思議ではない。しかしこの年齢という観点に基づいても、やはり沛国の劉頤を指すと見るのが最も妥当であろう。

(9) ただし、『梁書』殷鈞伝には「鈞體羸多疾」(鈞は體羸く疾多し)とあり、病がちであったことは記されている。なお、詩中の病のうち、「消渴病」とは、今で言う糖尿病のようなものと思われるが、『史記』司馬相如列伝に「常有消渴疾」(常に消渴の疾有り)とあり、謝靈運「勸伐河北書」(『宋書』本伝)に「消渴十年、常慮朝露」(消渴十年、常に朝露を慮る)とあるように、優れた文人が患っていた病でもある。つまり「劉兄」は実際にその病であったかも知れないが、過去の文人に擬える意味もあつたのではないか。また「癩眩疾」とは、目眩がして混乱する病、あるいはてんかんとされるが、梁王僧孺「致何炯書」(『梁書』本伝)に「吾無昔人之才而有其病、癩眩屢動、消渴頻増」(吾昔人の才無きも其の病有り、癩眩屢しば動き、消渴頻りに増す)とあり、やはり昔の才人の持つ病であつたようである。

(10) 「建徳」とは、そもそも有徳の者を諸侯に封ず、あるいは徳を行うという意味であるが、ここでは前後を考えると官職名であると推測される。よつてここでは揚州吳郡にある建徳県の令と解釈しておく。『宋書』州郡志一・揚州に「建徳令、吳分富春立」(建徳令、吳富春を分ちて立つ)とある。

(11) 後漢の李膺と郭太に関しては、『後漢書』郭太伝に「郭

太字林宗、太原界休人也。……始見河南尹李膺、膺大奇之、遂相友善。於是名震京師。後歸鄉里、衣冠諸儒送至河上、車數千兩。林宗唯與李膺同舟而濟、衆賓望之、以爲神仙焉」(郭太字は林宗、太原界休の人なり。……始め河南の尹李膺に見え、膺大いに之を奇とし、遂に相ひ友として善し。是に於いて名京師に震ふ。後郷里に歸るに、衣冠諸儒送りて河上に至り、車數千兩なり。林宗唯だ李膺と舟を同じくして濟り、衆賓之を望み、以て神仙と爲す)とある。

また晋の潘岳と夏侯湛に関しては、『世說新語』容止篇に「潘安仁、夏侯湛並有美容、喜同行。時人謂之連璧」(潘安仁、夏侯湛並びに美容有り、喜びて同行す。時人之を連璧と謂ふ)とある。いずれも友人の親しむさまをいう。

(12) 梁代の文人と建安文壇の関係については、拙稿「梁代の侍宴詩について」(『日本中国学会報』第五十四集 二〇〇二年)を参照。

(13) 王粲「贈蔡子篤詩」(『文選』卷三三)に「濟岱江衡、邈焉異處。風流雲散、一別如雨」(濟岱と江衡と、邈焉として處を異にす。風のごとく流れ雲のごとく散じ、一たび別ること雨の如し)とあるのを踏まえる。

(14) 『晋書』劉牢之伝に「不得已率北府文武屯洌洲」(已むを得ずして北府の文武を率ゐて洌洲に屯す)とあり、『資治通鑑』卷一一二には「牢之軍溧洲」(牢之溧洲に軍す)とある。胡三省注に、「晋書劉牢之傳作洌洲。……今舟行自采石東下、未至三山、江中有洌山、即洌州也。洌溧聲相近、故又爲溧洲」(晋書劉牢之傳は洌洲に作る。……今舟行して

采石自り東に下り、未だ三山に至らざるに、江中に洌山有り、即り洌州なり。洌と溧と聲相ひ近く、故に又た溧洲と爲す」といふ。

(15) 例えば『南齊書』魏虜伝に「慈姥置一軍、洌州置二軍、三山置二軍、白沙洲置一軍」(慈姥に一軍を置き、洌州に二軍を置き、三山に二軍を置き、白沙洲に一軍を置く)とある。